

白羽の矢が立って

「私は今、重度の知的障がいに伴う自閉症の息子を育てています。」と言われた時、あなたは何を思いますか。

人はいざ、自分の身に降りかからない限り専ら他人事で済ませてしまいがちです。これは過去の私自身にも言えることに他なりません。まさか我が家に、白羽の矢が立つなんて誰も思わないのです。「親ガチャ」という言葉が生まれて久しいですが、子が親を選べないように、親も子を選べません。この作文を通じて、題名の意味を少しでも感じていただければ幸いです。

我が家の小学二年生になる次男は、重度の知的障がいに伴う自閉症で、現在、支援学校に通っています。言葉を話すことはできませんが、「あっ」と声を出して、表情や目線、指さしやしぐさ等で要望を伝えてくれます。こちらの言うことも、日常に使う簡単な言葉なら、多少理解できているようで、学校では絵カードも活用しながら、コミュニケーションを学んでいます。

次男は元気に生まれ、すくすく育ち、一歳までは特に目立った成長の遅れは感じませんでした。ところが、一歳半健診を受けた際、指さしや発語がないことを指摘され、二歳の時、初めて心理診断を受け、そこから少しずつ療育の道を歩み始めることとなります。最初は「こんな可愛い次男に障がいなんてあるはずがない」と思い、年少で療育園に入園するまで、実に様々な葛藤がありました。入園後も、「どうしてこんなところに通わなければならないんだろう」と、毎日思っていました。

次男には二つ年上の兄（長男）がおり、当時、長男は地域の幼稚園に通っていました。次男も同じ幼稚園に入園する予定でしたが、障がいのある次男にとって、幼児教育か療育どちらが必要か考えた結果、苦渋の決断で、兄弟別々の園に通うことになったのです。

周りが息をするかのごとく当たり前、兄弟同じ幼稚園に通わせている中で、自分にも当たり前を訪れると思っていた未来が、自分にだけ訪れなかったことに、絶望しました。

次男に障がいがいなければ、兄弟同じ幼稚園に通うことができたでしょう。

しかし、次男が療育園に通う日々の中で、私はある事実に気が付きます。それは障がいは次男の一部であり、障がいがいなければ次男ではないということです。障がいも含めて次男なんだと気付いた時、障がいがいなければ、今日の前にいるこの愛しい存在に出会えなかったということになり、次男に出会えない人生なんて考えられないので、次男が次男でよかったと、心から思うことができたのです。

白羽の矢が立つと、これまでの日常が一変すると同時に、普通や当たり前という言葉がいかに視野の狭い言葉であったかを、身をもって知ることができます。

障がいをもって生まれた次男は、私の狭い視野を広げ、様々な価値観や考え方があることを教えてくれます。そして、今まで知り得なかった世界を見せてくれます。

日々の何気ないことも、決して当たり前ではなく、普通なんて言葉は、そもそもこの世に

存在しないのです。

普通や当たり前という言葉に囚われず、視野を広げることができれば、障がい者にとっても健常者にとっても、生きやすい世の中になるのではないのでしょうか。